

タイトル：2023 年度 教育セミナー（第 19 回）

日時：2023 年 9 月 21 日（木）～24 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室（303）

「東南アジアのムスリム社会は「保守化」したか？—マレーシアにおける日本発ポピュラー文化実践等の事例からの考察」

床呂郁哉（東京外国語大学 AA 研）

今回の講義ではマレーシアやフィリピン南部のムスリム社会を対象に、現地のムスリム社会の「保守化」にまつわる言説を再検討することを試みた。最初に簡単な自己紹介に続いて、東南アジアにおけるイスラームならびにムスリム社会に関する概要を紹介した。東南アジアにおけるイスラームの特徴として、それは歴史的に主に交易などを通じて広まり、その過程で各地のローカルな民間信仰や伝統等と混淆していった（いわゆるシンクレティズム）点などがしばしば指摘される。この点に関連するが、東南アジアにおけるイスラームに関しては、それを「寛容」「穏健」「多元主義的」「中東とは異なる」等々といった特徴で語る傾向も少し前まで強かったと言える。しかしながら 21 世紀に入ると、東南アジアのムスリム社会が「保守化」「過激化」「不寛容」化しつつあるという言説が、メディアや一部の研究者などのなかで徐々に顕在化するようになってきた。具体的には、宗教的・性的少数派等への不寛容の増加、中東発のいわゆるサラフィー主義やワッハブ派の影響の拡大、更には IS（イスラミック・ステート）系の過激な集団の活動の顕在化等がそうした「保守化」や「過激化」を端的に示す現象の例として挙げられることが多い。

こうした警鐘の中には、確かに一定の妥当性を有する場合も存在するものの、他方で、東南アジアのムスリム社会を総じて「保守化」等のレッテルで一枚岩的に理解することには、ある種の本質主義的なナラティブ危険性も免れないのではないだろうか。

この点に鑑み、今回は 2020 年の本教育セミナーでの報告をバージョンアップするかたちで、しばしば看過されがちなポピュラー文化の領域に注目して、東南アジアのムスリム社会のいわば「もうひとつの顔」に関する検討を行った。より具体的には、マレーシア等における日本発のポピュラー文化（カワイイ／オタク文化等）の越境と受容をめぐる事例を題材として、そこにおける身体表現・表象等についての紹介と文化人類学的な検討を行った。アニメやマンガ、ゲーム、コスプレなど日本発のポピュラー文化は近年の東南アジアのムスリム社会においても浸透しつつあるが、その中にはローカルな社会的文脈に応じて独自の展開をしている場合もある。その一例として、本報告では SNS における身体表現であるとか、マンガ（特に同人誌）文化、「ヒジャーブ・コスプレ」等の事例を中心に報告者の現地調査に基づいて紹介し、検討を行った。その過程で現地の民族/宗教的境界を超える文化生産であるとか、より多様なジェンダー表現をめぐる試みなどに注意を喚起した。

本講義では、現地におけるこうした日本発ポピュラー文化の受容を題材に、東南アジアム

スリム社会を「保守化」という単純で一枚岩的レッテルで理解する枠組みに替えて、むしろ摩擦や矛盾を含みながらも複数の多様な傾向や潮流が同時進行しつつある、という視点を提唱することを試みた。

(以上、終わり)